HIROSAKI UNIVERSITY

P4-4

院内がん登録データからみた本院における大腸がん患者の受療動向と予後

葛西　憲子[1]、福士　直子[1]、　野呂　和佳子[1]、松坂　方士[2]、田中　里奈[3]、佐々木　賀広[2, 3]
[1] 弘前大学医学部附属病院　院内がん登録室
[2] 弘前大学医学部附属病院　医療情報部
[3] 弘前大学大学院医学研究科　医学医療情報学講座

目的

弘前大学医学部附属病院は、主に津軽地域をカバーしているがん診療連携拠点病院であるが、津軽地域のみならず他地域や県外からもがん患者が受診している。一方、紹介状を持参して本院を受診したにもかかわらず、治療等を行わずに他院へ紹介となるがん患者も存在する。本検討では院内がん登録データを使用して、本院を受診した大腸がん患者の特徴を明らかにし、他院へ紹介となった患者との比較を行うことで、本院のがん治療の特徴を明らかにすることを目的とした。

方法

2013-2015年に本院で大腸がんと登録された患者(917名)を対象とした。症例区分により、診断・治療なしで他院へすぐ紹介となった患者(紹介患者)と、本院で何らかの治療方針を決定した患者(治療患者)に分け、それらの特徴を検討した。さらに5年生存率を算出し、比較した。

結果

表1. 大腸がん患者全体(青森県および本院)と治療患者の診断時病期(%)

	青森県(2014年罹患症例)	本院(全体)	治療患者
上皮内	29.9	35.6	38.3
限局	29.5	28.0	29.7
リンパ節転移	11.4	10.5	10.8
隣接臓器浸潤	7.5	4.6	4.4
遠隔転移	12.1	8.4	8.4
不明	9.5	13.0	8.4

図1. 青森県の二次医療圏と本院の位置

表2. 紹介患者および治療患者の特徴

		紹介患者	治療患者
性別	男性	40 (58.0)	540 (63.7)
	女性	29 (42.0)	308 (36.3)
年齢	0-69歳	42(60.9)	425(50.1)
	70-79歳	18(26.1)	304(35.8)
	80+歳	9(13.0)	119(14.0)
住所	津軽	33 (47.8)	588 (69.3)
	西北五	24 (34.8)	170 (20.0)
	青森	7 (10.1)	48 (5.7)
	八戸	0 (0.0)	3 (0.4)
	下北	2 (2.9)	3 (0.4)
	上十三	2 (2.9)	4 (0.5)
	県外	1 (1.4)	32 (3.8)

n (%)

進展度を比較すると、本院では青森県全体よりも上皮内、限局の割合が高かった。治療患者のみでは上皮内、限局の割合が本院全体よりも高かった。治療患者と紹介患者の比較では、年齢では紹介患者で0-69歳の若い患者割合が高かった。住所では紹介患者で他の地域から受診した割合が高かった。5年生存率(実測)を比較すると、治療患者で74.6%、紹介患者で59.1%であった。

結論

本院を受診する大腸がん患者は、あまり病期が進んでおらず、本院での治療により完治する可能性が高いために他院から紹介されて来訪しているといった特徴があることがわかった。他院へ紹介となった患者の生存率が低い理由として①紹介先での治療内容が十分でない②患者自身に腎不全等の併存症があるためにがん治療を受けることが困難である③他院へ紹介されたことにより治療開始が遅くなった、の3点が考えられた。③については、本来なら治療可能な患者であったのに他院へ紹介することで生存率が低下した可能性も否定できないため、今後詳細な検討が必要である。

本研究に関連し、COI関係にある企業等はありません。